

書評と紹介

ればならない。四九五―六のエウドクシオス（「エウドキオス」でなく）の信仰規準の訳、五〇一注一七の訳はかなり修正が必要である。四三〇の「アナコレーシス」は「アナコレーテース」とすべきであり、四五〇のプラトンの *paradeigma* の訳語「例証」は「範型」が定訳、四七八の *kurtoloxia* は *kuriolexia* の誤記、四八四の人名からはグレゴリオスが脱落している。四八三のハンソンからの引用も正確とはいえない。四七二注七九の邦訳『プラトン全集12』からの引用はおよそ忠実ではない。

本書は、アタナシオスの歴史と神学とを研究史を十分に踏まえて総合的に考察したうえで、その頌榮のモチーフに独自の意義を見出そうとする意欲的な研究である。このテーマは、一方では信仰者、とりわけアタナシオスのように教会の指導者として神学的な課題を背負っている信仰者が生きている現実の激動する政治的・社会的状況と、他方では信仰者が信仰の目標とする神の栄光賛美という礼拝的・頌榮的な生活との緊張関係、普遍化していえば、信仰者の歴史的生と宗教的生との関係という根本問題に連なっている。本書はこの点について多くの示唆を与えるものであるが、著者の主要テーマが十分根拠づけられるためには、今あげた緊張関係についてのより明確な方法的具体化が必要であり、それには典礼史的な視点からの研究も不可欠ではないかと思われる。

本書は学術的研究としては不備な点も少なくないとはいえ、今後本邦におけるアタナシオス研究の標準的著作の地位を占めることになるう。著者に今後の研究の発展を期待したい。

深井智朗著

『超越と認識』

——二〇世紀神学史における神認識の問題——

創文社 二〇〇四年八月三〇日刊

A 5判 vii + 三五五十五頁 六六〇〇円 + 税

佐藤 啓介

神学が神についての言述をつむぐ営みであるとして、絶対的な神について有限な人間が有限な言語をもってそれを営むことがそもそも可能なのか。こうした問いは、古くから神学の中で幾度となく繰り返されてきた問いである。だが、この問いは、近代以降進んだ宗教の私事化の果てに、「神なしに生きかつ考えることがあらゆる人間の日常生活を規定しているだけではないくキリスト教信者の日常さえをも規定している」（パネンベルク）現代に提起された場合、その深刻さは絶望的なまでに深くなる。本書において著者の深井氏が取り組んだのも、まさにその問いである。本書は二〇〇四年度中村元賞を受賞し、多方面で話題となったものであり、今、本書を取り上げるのは遅いくらいだと言えるかもしれない。事実、すでに本書に対しては、森本あんり氏（『日本の神学』四四号、二〇〇五年）や月本昭男氏（『創文』七月号、二〇〇五年）らが書評を記している。

著者は、バルトが『ローマ書注解』の初版を出版した一九一九年から、モルトマンが『体系』を完成させた一九九九年を

「神学の二〇世紀」と呼び（厳密には「ドイツプロテスタント神学の二〇世紀」と呼ぶべきだが）、その世紀の神学を貫く問題意識を取り出そうと試みた。それは、「人間は神を認識し得るのか」、あるいは「人間は超越の次元をいかにして認識し得るのか」という問いである。本書は、この問題が二〇世紀の神学の通奏低音であったという視点に立ち、二〇世紀神学を問題史的に概観し、そこから著者が考える「人間学を基礎とする神学の再構築」の可能性を取り出そうとした書である。

本書は、序章と終章を含めると全十章からなる。それぞれの章に厳密な連続性はなく、様々な既発表の論考をまとめたものであるが、問題意識は一貫しており、序章と終章がそれぞれ全体のよい概要と総括になっている。本書の章の並び順そのものについては立ち入った言及がないが、著者が最も好意的な関心をよせている神学者がパネンベルクであり（元々、上述の問題意識や神学の方法自体、彼から大きな影響を受けたものである）、彼を扱った第三章後半から第四章、第五章の一連の叙述が、本書の核をなしている。以下、著作としての一貫性に重きをおき、その構成に従いながら最低限のまとめを施しつつ、評者が感じた問題点などを記してみたい。

「序章 人間は超越の次元を認識し得るのか」においては、先述した著者の問題意識と問題設定が端的に与えられている。「二〇世紀の神学は、超越の次元を失った世界にあって、改めて「人間は神を認識し得るのか」、またもしそうであるなら「それはいかにして可能なのか」という問題と取り組んだとこ

ろにその特徴を見出すことができる」（一一）という見取り図に立ち、二〇世紀神学史を整理するための三つの類型が提起されている。第一の類型は「徹底的に神学を人間学に解消する」神学であり、この類型に含まれるのは、シュライアマツハーからトレルチらに引き継がれていった、「人間はアブリオリに神や超越の次元を認識することができると持っている」と考える立場である。第二の類型は「神学を人間学から徹底的に自律させる」神学であり、バルトに代表される立場である。そして、第三の類型が、両者を調停し、「人間学を基礎とする神学の再構築」を試みる立場であり、著者が本書で模索する立場もまた、まさにこの立場である。なお、ここで著者のいう「人間学」とは、「神学において、人間の神認識能力や人間の潜在的な能力から出発して神認識へと至ろうとする努力を、人間学的な課題、あるいは人間学と呼ぶ」（二三）と定義されている。

しばしば、神学史の記述では、「神中心か人間中心か」という焦点の位置のみが強調され、神学の歴史が神中心↓人間中心↓神中心…というシーソーのごとき反復運動を繰り返してきたかのような記述が見られることがある。しかし、著者は神（学）と人間（学）の二項の間に一種のベクトルを設定することで、「神学から人間学へ向かうベクトル」と「人間学から神学へ向かうベクトル」を区別し、第一の類型と第三の類型に明瞭な違い——それは一九世紀神学と二〇世紀後半の神学の違いに等しい——を見つけ出している。こうした類型は思想的展開に即していると同時に、汎用性が高いと思われる。

そうした類型に基づき、第三の類型に属す一人として「第一

書評と紹介

章 人間は超越のシグナルを聞き得るのか」で検討されるのが、神学者としてのバーガーである。特に、バーガーが提起した、世俗化し超自然的なものが衰退した現代社会において神学がとりうる三つの可能性に関する議論に、本章の論点は集中している。バーガーは「演繹的方法」（宗教的権威から神学的諸命題を演繹する立場）や「還元的方法」（現代の世俗性の枠組みの中で許容できるように、宗教的な内容を翻訳する立場）を退け、「帰納的方法」、すなわち、宗教的思考の出発点として通常の人間経験をとり上げ、その中から超越のシグナルを探り出していく方法を選ぶ。著者はこうしたバーガーの立場に共感をよせつつ、バーガーにおいては、「人間経験のうちに超越のシグナルが見出される」という仮定そのものが経験を越えた想定である以上、そこには密かに演繹的要素が前提にされていると指摘している（著者は触れていないが、この演繹と帰納の循環性は、いわゆる「仮説演繹法」と呼ばれるものであり、それ自体は何ら問題はない。むしろ神学で問われるのは、その命題が経験的な検証・反証可能性を有するかどうかにある。この点については後述したい）。ただし、著者の意図は単にバーガー批判にあるのではなく、この超越と経験の架橋、すなわち「非連続の連続」というアポリアの中で下からの神認識を語るという難題こそが、第三の類型の根本問題であるということを、バーガーを例として示すことにあつたのだと思われる。確かに、その他の章がドイツ神学であり、概ね年代順に並んでいるのに対し、この章がここに置かれた理由は思想的には判然としない。だが一方で、著者の類型のヴァリアント（著者の類型とバ

ーガーの類型は厳密に一致するわけではない）が示されることで、著者の意図が再認識できる序章の変奏、あるいは本論への橋渡しとして読むことができるだろう。

「第二章 人間は「神の像」をもっているのか」では、有名なバルトとブルンナーによる「自然神学論争」が取り上げられる。ただし、著者は一九三四年の論争だけを取り上げるのではなく、むしろその前史である思想的交流に注目し、三四年の論争はその交流の帰結であり、かつ、その論争によっても問題は未解決のままになっていることを豊富な資料をもとに例証している。ブルンナーは人間の中に神についての問いが存在し、それを「結合点」と呼んだが、著者はこれを「人間による神認識の可能性の問題」という自身の地平で捉えている。そして、バルトも以前には、ブルンナー同様の「人間の『問い』としての性格」に触れており、神認識の可能性という考えを残していた点を、鋭く指摘している。『教会教義学』においてその考えは破棄されるのだが、ブルンナーとの論争における「否」は、ブルンナーのそうした人間学的課題に対する神学的「否」ではなく、むしろ当時の社会的コンテクストの中で発せられた「否」と考えるべきだと指摘されている。

「第三章 神学の秘密は人間学なのか」は、「神学の秘密は人間学である」というフォイエルバッハのテーゼが、どのように二〇世紀神学史を動かしてきたのが、バルトとパネンベルクを素材として検討されている。フォイエルバッハのテーゼは、バルトにしてみれば、人間の宗教性から出発する近代福音主義神学を見事に批判しており、そうした神学を批判するバルトに

とって、フォイエエルバッハはむしろ「利益関係」に立つ者に思われたと述べられている。バルトはフォイエエルバッハを踏み台として、その批判をかわす人間学を秘密としない神学、すなわち啓示から出発する神学を立ち上げた。その意味で、著者の第一の類型から第二の類型が逆説的に派生する転換点に、フォイエエルバッハが立っていることがよく示されている。他方、そうしたバルトを「フォイエエルバッハの批判から回避しただけ」と批判し、人間学の領域において神思想の真理性をめぐる戦いを展開したパネンベルクが取り上げられる。フォイエエルバッハは、第二の類型から第三の類型へと神学史がシフトする際の転換点にもなるのである。

こうして全体としてみた場合、序章から第一章では類型論の全体、第二章と第三章では神学史における類型の具体的展開が辿られ、第三章後半から、本格的に第三の類型の可能性が詳述されていくという構成になっている。

「第四章 神の啓示は歴史学的に検証可能なのか」では、一貫して「下からの神認識」の可能性を唱えるパネンベルクのうち、初期の「歴史を通しての神認識」という企てが検討される。パネンベルクは、バルトの啓示神学を、「上からの」啓示認識を「下からの」啓示認識へと鑄造しなおすことで批判的に受容し、また、その転換を可能にする方法として、フォン・ラートから「神は歴史を通して自己を啓示する」という思想を学んだという過程が整然と説明されている。著者はこのパネンベルクによる歴史学的方法と教義学的方法との統合を「新しい神

学的認識論の確立」(一七二)として高く評価している。また、パネンベルクがこの歴史を通しての神認識を主張する際に重視するのは、「神学的命題の仮説性」である。神の約束と成就からなる歴史は、終末へ向けて延長されているため、終末以前の現在における神認識は「先取り」による仮説の域をでないからである。だが、このパネンベルクにおいて決定的である「先取り」概念は、本章では詳述されず、第六章のモルトマンとの比較の中で、副次的にのみ扱われている。パネンベルクの先取り概念に関する議論は、むしろこの章の中で展開すべきではなかったかと思われる。

第四章と対をなすのが「第五章 人間学を基礎学とする神学は可能なのか」である。ここでは、初期パネンベルクにおいて「神の問題」が論じられる手続きが検討されている。パネンベルクの基本的な立場は「神の問題を解明するために人間学的な基盤を発掘する」(一七七)というものであり、彼は人間学を「基礎神学」として設定する。その課題は「神、あるいは神的なものなしに人間学は可能なのか、あるいは神なしに人間を語れるのか」ということを証明する(一九〇)ことだという彼の立場が示されている。ここで著者は、人間学に神の現実性に関する証明をパネンベルクが期待していると見なす誤解が起これらぬよう、慎重に論を運んでいる。この点はパネンベルクにまつわる誤解を解く上でも、有効な議論だと思われる。ここからパネンベルクは、有限な人間が無限へと開かれた「世界開放性」を有している点、そしてその根底にある「主体の構成における自由の起源」のうちに、「人間の本質の構成における神的

書評と紹介

なものの必然性」(一九六)を証明したとされている。ただし、それはまだキリスト教の神ではなく、神的なものの一般に留まるため、「基礎神学としての人間学の上に、もう一ついわば「第二法定」としての「宗教史」という舞台」(二〇七)が設定される論理構造が描写され(そして、この舞台が第四章で扱われた歴史の問題へと遡及する)、最後に、そうした予備法廷を経て展開される彼の三位一体論が概略されている。著者はパネンベルクに対していくつかの留保をつけるが、やはり注目されるべきは、第二法定である宗教史という視点には「あらゆる現実を規定する力としての神」というキリスト教的前提が暗黙のうちに読み込まれており、「この人間学から、「宗教の神学」を経て、キリスト教的な神へという道は、どれだけ彼がはじめに意図した普遍的なものから個別的なものへという構想を保持し得ているか疑問である」(二二四)という指摘であろう。読者はここで、第一章のバーガーにおいて確認された第三の類型の根本問題ともいえるアポリアに、再びパネンベルクとともに直面することになるのである。それに対する著者自身の立場は、「パネンベルクの構想……が、彼が主張するような意味での弁証学的であり、普遍的であることを目指すならば、この線での試みの徹底化が必要ということになる。それが人間学を基礎学とする神学に対して残された課題、あるいは未解決の継続されるべき課題なのである」(二二五)という結びによく示されている。

第六章以降は、第五章まででその基本的志向や方法論が明確

になった第三の類型について、パネンベルク以外での展開が例示されたケース・スタディだといえよう。「第六章 神認識における「先取り」(Antizipation) 構造」では、パネンベルク同様、「先取り」概念を用いて歴史を神認識の舞台として設定しつつ、独自の論を展開したモルトマンが扱われている。パネンベルクは復活における終末の先取り構造から普遍的人間学を展開したが、その際、最後の審判という聖書的意味を曖昧にしまった。それに対し、モルトマンは復活と十字架の関係を重視し、「先取り構造の中に義と裁きのシンボルを位置づけている」(二五四) 点に独自性があることが論じられている。

第四章以来、下からの神認識Ⅱ歴史を通じての神認識という等号が成立しているかのような論の運びであったが、「第七章 それは神学におけるパラダイム・シフトなのか」においては、歴史以外を手段とする第三の類型の可能性が提示される。それが、後期モルトマンにおける「自然を通じての神認識」という可能性である。モルトマンの宇宙論的キリスト論やエコロジカルな復活論を、著者は「歴史を自然のパラダイムの中に包括する試み、自然というパラダイムを通しての神認識の試み」(二六五)として捉えている。著者はこうしたモルトマンの試みに対して、モルトマンは歴史と自然の対立を強調しすぎているとの批判を投げかけているが、十分な掘り下げには至っていない。この点は、パネンベルクとモルトマンの関係という主題にまで関わる重要な論点でもあり、著者の研究の進展を期待したい箇所である。

「第八章 象徴的神認識は可能か」は、第三の類型のうちで

も、神認識の問題の核心ともいべき「非連続の連続」——有限な人間が無限なる神を認識するという逆理——に密接に関わるテイリツヒの象徴論が論じられる。ここで著者は、非連続の連続の中での神認識の完成をテイリツヒには見ず、むしろ、テイリツヒの象徴論的神認識の厳密化は象徴的認識論の限界を示し得たという点で評価するにとどめ、テイリツヒの象徴論的神認識にはさらなる補足を必要とする主張している。

以上の議論に対し、的確なまとめと今後の展望を与えてくれるのが、「終章 神学的認識論と人間学の課題」である。特に終章では、第一と第二の類型が実は「同質性の原理」を採用している点で共通しており、本書で扱われた様々な神学者が属する第三の類型は、それとは異なる「類比の原理」に立っているという総括的論述がなされる。そして、「類比の原理は、神認識における神と人間の「非連続の連続」を考えているので……人間学から出発する神学を構築することを可能にする。その点で類比の原理は神学的人間学の認識論となる」(三〇八)と確言される。続いて、人間学の課題とは「神と人間との「非連続性」にもかかわらずなぜ神認識が可能になるのかを理論付け、その仮説を提示する」(三二〇)ことだと規定されている。この人間学とは人間の行動や経験についての記述的で経験的な学であり、そこから帰納的に導かれる命題が、神学的主張と相關関係を持つている場合、神認識の「仮説」を提示できるという著者の今後の神学的プログラムが提示されている。換言すれば、それは「人間の問いとしての性格から出発し、その問いに対する答えとしての神へと向かう道を探る」(三二二)営みな

のである。

以上、各章の内容について、著作の一貫性や全体的主張という点に留意しながら、概略してきた。著者が提示した類型論は非常に明快であり、「第三の類型」という概念のおかげで、ひたすらに「多様化」の一途を辿るばかりであったかに思われた二〇世紀神学史を全体として捉える、極めて有効な視点が得られたと評価できるだろう。不勉強な評者自身、見通しの悪かった視野に光を得た気分であった。無論、そうした全体的な議論が単なる印象論に終わることがないのも、第二章や第三章の議論に代表される資料の緻密な読解という支えがあるからであろう。特に、バルトにおいても人間からの神認識の問題が浮上していたという指摘に見られるように、自身の類型を濫用せず、個々の思想家の中にも様々な要素が重なっていることを見逃さない手さばきは、著者が類型論とは何であるかをよく理解している証左であろう。また、人間学を基礎とする第三の類型が、単なる神学史の帰結であるというばかりではなく、それが無神論化し世俗化した現代社会というコンテクストにおいて囑望されるものであるという著者の現実認識はまさに正当と言わざるをえまい。

しかし、二〇世紀神学史を思い起こした上で本書の目次を概観したとき、ある名前が見当たらないことに気がつく。それは、ブルトマンおよびその弟子たちである。「あとがき」によれば、収録予定であったブルトマンに関する論考は、分量の関係で削らざるをえなかったという。だが、この遺漏は、著者が

書評と紹介

考えている以上に大きなものではないだろうか。それは、二〇世紀神学における神認識の問題では、「歴史」や「自然」と並び、いや、それ以上に「言語」という主題が大きく取り上げられてきたからであり、まさにブルトマンを一つの契機として、言語を拠り所とする解釈学的神学が展開していったからである。確かにブルトマンの名は随所で散見されるが、主題的な扱いはなく、著者の類型においてどこに位置するのかは明言されていない。また、ティリツヒが取り上げられたことで、象徴による神認識の可能性が検討されたが、果たして、言語による神認識は第三の類型に含まれるのかどうか。ブルトマンの非神話化はバーガーの議論（バーガーはブルトマンを還元的方法と特徴付けている）から「第一の類型」に近いものと見なされているように評者には判断されたが、エーベリンクにおいて確立されユンゲルに継承された「言葉の出来事」（言葉において、聴く者が言葉へと抜け出て事柄に出会う脱自的出来事）は、「下からの神認識」の核心にある「非連続の連続」を経験する一つの契機として考えることはできないのだろうか。

また、言語という主題の遺漏は、そうした無い物ねだりには尽きない問題を孕んでいる。著者がパネンベルクやモルトマンにおいて検討した「歴史を通した神認識」は、実際には言語的テクストを経由せざるを得ない以上、歴史と言語の問題——ひいては、人間の経験それ自体を構成する言語の働きという、言語論的転回以後、常套句と化した問題——にも論及せざるをえないと思われるのである。本書の構成が、二〇世紀神学史がこれまで言語偏重だったことへの暗黙の批判となっているという

穿った読み方もできるのだが、著者自身が正しくも触れているように、たとえばフォン・ラートの伝承史とは「歴史記述の性格としての伝承史」（二六六、評者強調）でもあったはずであり、また、「歴史とは「事実」(facta)と「解釈」(dicta)とが結びついたもの」（二五〇、評者強調）である以上、著者の議論構成そのもののうちに、「言語を通した神認識」という問題系は入らざるをえないのではないだろうか。

もう一点、本書において疑問が残る点がある。それは、森本あんり氏の書評でも述べられている通り（森本、一八八）、神学が「仮説」としての性格を持つことが強調される一方で、その仮説がどのように検証されるかが不鮮明なことである。また、この問題は著者自身の立場を表明するのに先立ち、パネンベルクの仮説性に関する著者の記述についてもいえる。著者の記述にも、パネンベルクの考える仮説性に関する議論（具体的には一七二頁）は見られるが、パネンベルク自身は『学問論と神学』（一九七二年）において、論理実証主義に始まり、当時のドイツでポツパーやアルバートを中心として勃興した実証主義論争を広く扱い、ポツパーの反証主義を「歴史学を含む精神科学では、その対象が合法的なものではない以上、検証も反証も同程度の妥当性を有する」という理由から退け、その上で神学の仮説性を主張していたはずである（その意味で、パネンベルクの先取り概念も、この仮説性を保証する学問的手続きと関連させて論じるべきであろう）。

一般的にも、また、パネンベルク自身によっても主張されているように、仮説性の最も重要な点とは、その命題が経験的な

検証可能性・反証可能性に開かれていることである。だが、著者は終章において「神学的な主張、ないし仮説は、人間学の舞台上に換言され、検証されるが、人間学の問いもまた神学において検証される」と言う。前半はともかく、後半は一体どういうことだろう。人間学の問いが神学において検証されるというのであれば、神学は「経験的な学」ということになる。しかし、神学がその本質において経験的な学ではないからこそ、まさに著者は人間学を基礎とする必要があったのではなかったのか。この奇妙な一文に、著者のいう「神学の仮説性」、そして「人間学を基礎とする神学」という企てそのものの危うい揺らぎを感じるのは、評者の単なる微視的な穿鑿だろうか。

以上、「言語」と「仮説性」という点で評者の拙いコメントを述べさせていただいたが、本書が、二〇世紀神学を体系的・包括的に論じる上で、今後繰り返し参照せざるをえない重要な一冊であることは間違いない。評者もまた、本書より多くの視座を学ぶことができた一人として、著者に深く敬意を表し、拙文を閉じたい。

寺戸淳子著

『ルルド傷病者巡礼の世界』

知泉書館 二〇〇六年二月二八日刊
 菊判 x三十五五六頁 六八〇〇円＋税

坂田 正 顕

本書は、著者が二〇〇三年十一月にまとめた博士論文を加筆修正して二〇〇六年度に刊行された五五六頁にもおよぶ大著である。日本ではルルド巡礼に関しては、これまで一部の断片的な紹介、巡礼記、同行医者によるエッセー翻訳書などに限られてきたが、本書は日本人研究者によるはじめての体系的かつ総合的な研究書であり、今後の巡礼研究にとっては言うに及ばず、関連諸分野においてもまた一般読者にとっても豊富な価値ある資料と数多くの問題視角を提供している基本文献となるであろう。また、すでに二〇〇六年度日仏会館主催の第二三回沢・クロードル賞を受賞していることから推し量れるように、本書は単なる個別巡礼に関する事例研究の域をはるかに超える広がりを持った近年の巡礼研究における一大労作である。たとえば、その分析メスは、ルルド巡礼の成立とその発展に深く関わってきたフランス社会の政治・経済・文化的状況やフランス・カトリック宗教界の諸動向などにも広く及んでおり、いわば一味変わった近現代フランス社会の裏面史としても読める